O-9

新潟県頭頸部悪性腫瘍登録委員会における登録症例の検討

―1986-1999 年と 2000-2011 年の比較―

新潟医療福祉大学言語聴覚学科・佐藤克郎

【背景】

頭頸部癌は発生頻度が低いため，単一施設では経験する症例数が限られ，臨床統計の集計は困難なことが多い．1986 年に新潟県内の 26 病院の耳鼻咽喉科が参加して新潟県頭頸部悪性腫瘍登録委員会が発足し，新潟県全体での頭頸部癌症例の臨床統計を行っている。2003 年には、現在までの期間の前半に相当する 1986-1999 年の統計を報告した [1]．今回われわれは，前回の報告以降の 2000-2011 年の登録症例を追加するとともに同期間中の頭頸部癌症例の推移を検討し，さらに前回の報告と比較することにより，新潟県全域における頭頸部癌の変遷を検討したので報告する．

【方法】

調査開始から 2011 年までの 26 年間に新潟県悪性腫瘍登録委員会に集められた頭頸部癌登録症例の全記録の総数を集計した．次に、前回の報告以降の 2000-2011 年の 11 年間に集められた記録をもとに期間中の疾患別年次推移を集計し，さらに 1986-1999 年の前回報告との差異を検討した．

【結果】

26 年間の総症例数は 9,011 例であった．最も頻度の高かったのは喉頭癌 2,485 例(27.6%)で，甲状腺癌 1,612 例(17.9%)，口唇・口腔癌 1,155 例（12.8%）が続いた（図 1）．

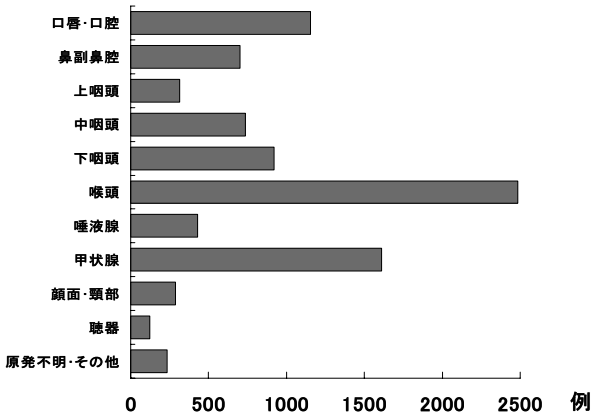

図 1：1986-2011 年の疾患別総登録数

後半 11 年間の調査期間内の増減傾向では，中咽頭癌，下咽頭癌，甲状腺癌が増加傾向にあり，鼻副鼻腔癌，喉頭癌で減少傾向がみられた．1986-1999 年の前半の合計と 2000-2011 年の後半の合計を比較すると，3%以上増加していたのは下咽頭癌，甲状腺癌で，3%以上減少していたのは口唇・口腔癌，鼻副鼻腔癌，喉頭癌であった（図 2）．全症例の平均年齢は初期の 62.2 歳から後期の 64.0 歳と、若干高齢化傾向がみられた。性別をみると，口唇・口腔癌，下咽頭癌，唾液腺癌で男性の割合が増加していた．

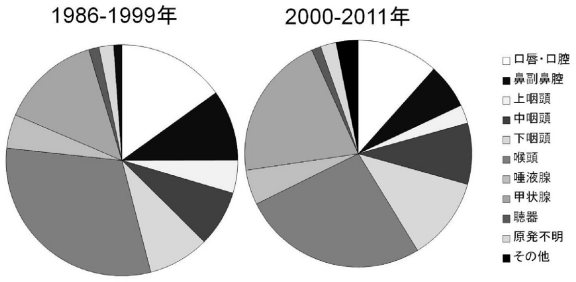

図 2：1986-1999 年と 2000-2011 年の疾患割合

【考察】

後半の調査期間中増加傾向にあったのは中咽頭癌，下咽頭癌，甲状腺癌で，中でも下咽頭癌と甲状腺癌は初期に比べて 3%以上増加していた．調査期間中減少傾向にあったのは鼻副鼻腔癌，喉頭癌で，口唇・口腔癌，鼻副鼻腔癌，喉頭癌は初期に比べて 3%以上減少していた．咽頭癌の増加は、アルコール消費量の増加という社会現象の影響が推察された．甲状腺癌の増加は，以前は外科で取り扱うことの多かった甲状腺癌が「頭頸部外科」という概念の普及に伴い耳鼻咽喉科に紹介される症例が増加したためと考えられた．鼻副鼻腔癌の減少は，鼻副鼻腔癌症例で既往が多いことが知られている慢性副鼻腔炎の罹患率の低下の結果と思われた。喉頭癌の減少は、社会全体での喫煙率の減少傾向の結果と推察された．これまでの新潟県頭頸部悪性腫瘍登録では，施設間で治療方針のばらつきがあるため予後の検討には至らず、予後の報告は新潟大学など単一施設で行っていた [2]．今後は，治療プロトコールの統一などを図り，頭頸部癌の治療成績と新しい治療法の提案を新潟県から発信していくことが重要と考えられる．

【結論】

新潟県頭頸部悪性腫瘍登録委員会という多施設研究を継続してきたことにより，発生頻度が低く単一施設では集計の難しい頭頸部癌症例の動向を新潟県全体として検討することができた．

【文献】

1) 大倉隆弘、長谷川聡、川名正博、他：新潟県の頭頸部悪性腫瘍 4,053 例の検討―第 1 報：発生部位とその背景を中心に―．日本耳鼻咽喉科学会会報 2003;106:164-172.

2) 佐藤克郎：新潟県および新潟大学における頭頸部癌診療の現況．新潟市医師会報 2012;499:2-8.